

# 核戦争防止 滋賀県医師の会会報

発行  
核戦争防止滋賀県医師の会  
大津市浜大津2丁目1番36号  
〒520-0047 フコク生命ビル8階  
TEL 077-522-1152  
FAX 077-525-3093

2013年9月25日  
第39号

## 第29回総会および講演会のご案内

**日時** 10月6日(日) 総会 10:30~11:15  
講演会 13:00~15:00

**会場** 大津市生涯学習センター 1階 ホール  
(JR膳所駅から徒歩20分、京阪電車膳所本町駅から徒歩7分)

○ **総会議事** (1階ホール控室 10:30~11:15)

2012年度活動報告・決算報告  
2013年度活動方針案・予算案・役員改選など

○ **講演会** (1階ホール 13:00~15:00)

【演題】 「放射線被曝から子どもたちの健康を守るために  
～チェルノブイリ原発事故医療支援の経験を通して」

講師 長野県松本市長・医師 <sup>すげのや</sup>菅谷 昭氏



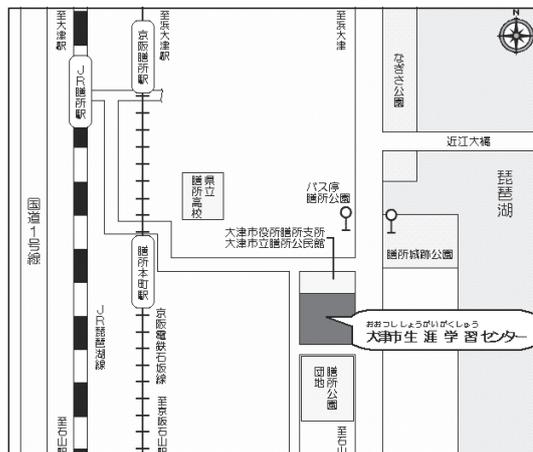
福島第一原発では、汚染水の流出が続き収束とは程遠い状況です。多くの住民が高い放射線量の中で生活を余儀なくされ、除染も十分に進まない中、帰還が進められています。住民の健康がないがしろにされていると言わざるをえません。

菅谷昭氏は、チェルノブイリ原発事故後のベラルーシで甲状腺癌の治療にあたってられました。また、著書の中では、甲状腺癌以外の健康被害についても述べられています。内部被曝による健康被害について、ご自身の体験に基づく貴重なお話をうかがえるものと考えます。

★講演会に参加ご希望の方は事前に申し込みが必要です。会報に同封している参加申込書に代表者名と参加人数、代表者連絡先(電話・FAX)をご記入の上、滋賀県保険医協会(FAX 077-525-3093)にお送りください。(参加無料・定員400人)

主催：滋賀県保険医協会  
後援：核戦争防止滋賀県医師の会他

会場へはできるだけ公共交通機関をご利用ください



# 「核戦争防止滋賀県医師の会」

## 第29回総会に向けて

運営委員代表 上島 弘嗣



福島原発事故から2年半以上経過した現在も、放射能汚染は解決の糸口が見つかっていません。汚染水の貯蔵タンクや地下水から放射能汚染が広がる危機に瀕しています。そして、今なお、多くの方々が放射能汚染による避難生活を余儀なくされています。

一方、中東情勢は予断を許さない状況です。本稿を書いている現在では、アメリカのオバマ大統領は議会の後ろ盾を得て、シリアを攻撃する準備を整えています。これは、中東からさらに世界へと戦火が広がる危険性を孕んでいます。イラクやアフガン戦争の経験をどのように生かしているのか疑問に思います。これが発火点となつて、さらに核による汚染へと広がる可能性を危惧します。アメリカは日本の同盟国との視点から離れて客観的に見ますと、アメリカは第2

次世界大戦後も世界で戦争をし続けた国という現実が浮かび上がってきます。

さて、今回の総会のあと、滋賀県保険医協会主催、核戦争防止滋賀県医師の会後援の現長野県松本市長 菅谷 昭氏による講演会「放射線被曝から子ども達の健康を守るために」キエルノブイリ原発事故医療支援の経験を通して」に是非ともご出席願いたいと思います。

氏は甲状腺専門の医師として、キエルノブイリの子供達の甲状腺がんの手術やその他の治療活動に5年半も現地に逗留し、地域の人々の医療の支えとなつて活動されました。その貴重な経験を踏まえて、日本における不幸な原発事故による放射能災害からいかに子供達を守るかのお話しをされます。

是非、総会、講演会にふるつてご参加されますようお願い致します。

## 二〇一三年度活動報告

(2012年8月～2013年7月)

### 1. 近畿反核医師懇談会

(9月、13年1月)

9月30日、京都で開催。同日、市民公開講演会として「韓国の核兵器廃絶運動の現状と今後」と題して、韓国反核医師の会執行役員の金益重(キム・イクチュン)氏が講演した。韓国反核医師の会は2011年に結成した。金氏によると、韓国では日本と同じで国策で原発政策がすすめられ現在23基が稼働している。将来的には50基を超える原発を建設し「原発大国」を目指しているという。国民には「原発安全神話」が流布され、補助金で懐柔策がとられるなど、日本の現状ととてもよく似ている。福島原発事故により韓国の世論が大きく変化し、国民の反原発運動が大きく広がっている。

1月13日、神戸で開催。最初に11月17日に京都大学で開催された国際シンポジウム「戦争と医の倫理」ドイツと日本の検証史の比較」を保障連会長・住江憲勇氏が報告した。続いて各団体から活動紹介と意見交換があった。

### 2. 核戦争防止滋賀県医師の会

#### 第28回総会

(10月8日)

コラボしが21で開催。冒頭、物故会

員3人に黙祷を捧げた後、2011年度の活動報告として、23年ぶりに広島で開催されたIPPNNW世界大会や、近畿規模で開催された講演会などが紹介された。続いて2012年度活動方針案、2012年度予算案、2012年度役員選出をそれぞれ承認した。

### 3. 講演会「じわじわと命を蝕む

#### 低線量・内部被曝の恐怖」

(10月8日)

医師の会は後援団体として協力した。参加者は230人でコラボしが21大会議室をほぼ埋めた。講師の医師・肥田舜太郎氏は、1945年広島原爆で被爆しながらも医師として今日まで6,000人以上の被爆者を診察された経験を話した。特に福島原発事故による低線量内部被曝の影響は、原爆被爆による影響と共通していると強調された。(詳細7頁)

### 4. アメリカの新型核性能実験に

#### 抗議文送付

(12月8日)

12月5日、米国はネバダ州の核実験場で未臨界核実験を行った。オバマ政権になつて3度目の未臨界核実験である。これに対し医師の会は8日、オバマ大統領とルース駐日大使宛に抗議文を送付した。オバマ大統領は2009年4月、プラハで「核なき世界」を提唱し、同年ノーベル平和賞を

受賞している。核実験はプラハ宣言と相反する行動である。

### 5. 北朝鮮の地下核実験に抗議文を送付 (2013年2月15日)

2月12日、北朝鮮は2009年5月から3回目の地下核実験を実施した。これは国連安全保障理事会決議で、北朝鮮に対し核実験の挑発行為を行わないよう求めていた中で、国連決議を無視するように強行された。これに対し医師の会は同日、金正恩総書記宛に抗議文を送付した。

### ジブリ小冊子『熱風』改憲特集号を送付します

憲法「改正」の動きが加速する中、スタジオジブリが発行している小冊子『熱風』7月号において「憲法改正」が特集され、大きな反響を呼んでいます。

幅広い世代が憲法や平和の問題について考えるきっかけとなる冊子だと思います。ぜひ積極的に活用ください。



## 2012年度決算報告

(2012.8.1~2013.7.31)

収入の部		支出の部	
会費収入 会員年会費@5,000 賛助会員年会費@2,000	289,000	事業費 第28回総会費用 反核医師・医学者の集い 近畿反核医師懇談会 映画「ひろしま」チケット代 会報発行 事務委託料	336,350
雑収入 預金利息	96	通信事務費 ハガキ・封筒 会費請求・領収証発送	9,049
前期繰越金	638,817	雑費 銀行振込手数料 郵便振替手数料	2,085
		次期繰越金	580,429
計	927,813	計	927,913

## 2013年度予算案

(2013.8.1~2014.7.31)

収入の部		支出の部	
会費収入 @5000×会員60人 @2000×賛助会員2人	304,000	事業費 第29回総会費用 医師・医学者のつどい 近畿反核医師懇談会 会報発行・事務委託料	320,000
雑収入 預金利息	100	通信事務費 切手・ハガキ 会費請求送料	20,000
前期繰越金	580,429	雑費 銀行振込手数料 郵便振替手数料	3,000
		予備費	541,529
計	884,529	計	884,529

## 二〇一三年度役員(案) (敬称略)

### 運営委員代表

上島 弘嗣(滋賀医科大学名誉教授)

### 運営委員

今村 浩(開業医)

大西 利穂(開業医)

嶋田 歩(開業医)

埜田 和史(滋賀医科大学准教授)

福田 章典(開業医)

藤居 明範(開業医)

### 監事

木下 康(開業医)

## 二〇一三年度活動方針(案)

- 一、会員拡大への取り組み
- 一、県民対象の講演会等の開催
- 一、民間団体との連携
- 一、憲法九条を守り、反戦平和の取り組みを拡大する
- 一、核兵器の廃絶に取り組み、新たな核拡散を防止するための運動を推進する
- 一、他府県の「医師の会」と連携を保ちつつ、「核戦争防止国際医師会議」(IPPNW)の活動に協力する
- 一、原発に関して、会員、県民に対し情報提供を進め、原発からの脱却に向け取り組みを行う

## 最近の情勢

### 1. シリアの化学兵器

#### 国際管理・廃棄へ結束を

(2013年9月13日)

シリアの化学兵器を国際管理によつて廃棄させる方向へ、各国が歩調を合わせ始めた。

ロシアの提案を、オバマ大統領が一定に評価。外交解決を優先させると、国民に向けて演説した。武力行使容認を求める決議案は採決を先送りさせた。軍事介入という事態が当面回避されるのは歓迎できる。

実現すれば、国際社会が軍事力によらず化学兵器を封じ込める画期的なケースとなろう。ぜひとも合意し、実行に移してもらいたい。

20カ国・地域(G20)首脳会合は、軍事介入を主張する米国と、阻止したいロシアの思惑が衝突し、決裂していた。その後、両国首脳の歩み寄りから、事態が好転した意味は大きい。米国は化学兵器使用をシリア政権側によるものと断定し、軍事介入を表明した。ところが英国が追従しなかったうえ、米国内でも反対論が強い。ロシア提案に救われた面もあるようだ。しかしプーチン大統領がシリア擁護に固執し、提案を時間稼ぎに終わらせるようでは台無しとなる。真に外交解決を目指す決意があるのか。本気度を世界が注視している。

シリアの大統領もロシア提案の受け入れを表明した。化学兵器禁止条約に参加する意向も見せており、前進を期待したい。

フランスが早速、国連安全保障理事会にかけると決議草案を示した。シリアに国連査察の完全受け入れなどを求める内容と伝えられる。応じなければ、国連憲章7章に基づき武力行使を容認するとしている。

これにロシアが反発した。米仏による武力行使の放棄が先だと主張する。だが、入り口のつばぜり合いで時間を浪費するのは不毛だ。米仏には軍事介入の選択肢をいったん凍結することを求めたい。

ただ、国際管理下に置いて廃棄させるといつても、容易ではない。一体、誰がどう進めるのか。具体的な道筋は示されていない。まずは生産や保有の実態を明らかにするよう、シリアへの圧力を強めねばならない。

そのためにも各国は思惑を捨てて結束し、この問題について断固とした姿勢をシリアに示す必要がある。そのうえで早急に実効性ある手段を練るべきだ。

化学兵器管理の一方、使用した「犯人」の特定も忘れてはならない。子どもを含む民間人にも死傷者を出した。近くまとまる国連調査団の報告を受け、徹底した追及が求められる。内戦による死者は10万人を超えて

いる。にもかかわらず、解決の糸口さえ見いだせていないのが実情だ。化学兵器に対する結束を機に、一日も早い内戦終結へとつなげたい。

加えて今回の事案を外交解決のモデルとして生かせないか。というのも、これまで国際的な対立には、米国が軍事介入するケースが多かった。だが解決に至らないばかりか、問題を悪化させてきた。外交的なアプローチこそ、真の解決策という認識に転換するべきだろう。

核開発を進めているとして米国が敵視するイランにも、今回の手法で放棄を促したい。さらに中東和平実現には、紛争が続く要因であるイスラエルの核疑惑にも、迫っていく必要がある。もちろん中東ばかりではない。北朝鮮に対しても、有効に機能しうるに違いない。

### 2. 汚染水、外洋まで流出か

#### 海近くの排水溝、一時高濃度

(9月13日)

1リットルあたり2200ベクレルのストロンチウムなどを検出

東京電力福島第一原発のタンクから高濃度の汚染水が漏れた事故で、海近くの排水溝で放射性ストロンチウムなどの濃度が11日に一時的に高まっていたことがわかった。東電はこの日まで、排水溝の上流で除染作業をしていた。「汚染水の一部が海に出て

いる可能性は否定できない」という。

排水溝は雨水などを流す設備で、直接外洋につながっている。外洋から150メートルの地点で、11日に採取した水からストロンチウムなどベータ線を出す放射性物質が1リットルあたり220ベクレル検出された。放射性セシウムも104ベクレル検出された。12日に再び水を採取して測ると、放射性物質は検出限界値未満だった。

上流には、300トンの高濃度汚染水漏れを起こしたタンクがあり、漏れが発覚した直後に汚染水が排水溝に流れ込んだ。このため、11日に排水溝を高圧洗浄して、たまっていた泥などを除去する作業をしていた。その作業で放射性物質の一部が下流に流れた可能性があるという。

### 3.〈安倍首相〉「汚染水」完全に「ロック」発言、東電と食い違い

(9月9日)

安倍首相が言及した

「0.3平方キロ」のエリア

安倍晋三首相が、7日にアルゼンチン・ブエノスアイレスで行われた国際オリンピック委員会（IOC）総会の五輪招致プレゼンテーションで、福島第1原発の汚染水問題をめぐり、「完全にブロックされている」「コントロール下にある」と発言したことについて、「実態を正しく伝えていない」と疑問

視する声が出ている。

9日に開かれた東京電力の記者会見で、報道陣から首相発言を裏付けるデータを求める質問が相次いだ。担当者は「日も早く（状況を）安定させたい」と応じた上で、政府に真意を照会したことを明らかにするなど、認識の違いを見せた。

防波堤に囲まれた港湾内（0.3平方キロ）には、汚染水が海に流出するのを防ぐための海側遮水壁が建設され、湾内での拡大防止で「シルトフェンス」という水中カーテンが設置されている。また、護岸には水あめ状の薬剤「水ガラス」で壁のように土壌を固める改良工事を実施した。

しかし、汚染水は壁の上を越えて港湾内に流出した。フェンス内の海水から、ベータ線を出すストロンチウムなどの放射性物質が1リットル当たり1100ベクレル、トリチウムが同4700ベクレル検出された。東電は「フェンス外の放射性物質濃度は内側に比べ最大5分の1までに抑えられている」と説明するが、フェンス内と港湾内、外海の海水は1日に50%ずつ入れ替わっている。トリチウムは水と似た性質を持つためフェンスを通過する。港湾口や沖合3キロの海水の放射性物質は検出限界値を下回るが、専門家は「大量の海水で薄まっているにすぎない」とみる。

さらに、1日400トンの地下水が

壊れた原子炉建屋に流れ込むことで汚染水は増え続けている。地上タンクからは約300トンの高濃度汚染水が漏れ、一部は、海に直接つながる排水溝を経由して港湾外に流出した可能性がある。不十分な対策によるトラブルは相次ぎ、今後リスクは残る。「何をコントロールというかは難しいが、技術的に『完全にブロック』とは言えないのは確かだ」（経済産業省幹部）という。

安倍首相は「食品や水からの被ばく量は、どの地域も基準（年間1ミリシーベルト）の100分の1」とも述べ、健康に問題がないと語った。厚生労働省によると、国内の流通食品などに含まれる放射性セシウムによる年間被ばく線量は最大0.009ミリシーベルト。だが、木村真三・独協医大准教授は「福島県二本松市でも、家庭菜園の野菜などを食べ、市民の3%がセシウムで内部被ばくしている。影響の有無は現状では判断できない」と指摘する。

## 会員投稿

### 日韓反核医師交流の旅

〜 韓国の原発事情を視察して

運営委員 福田 章典



2013年7月13日  
日から15日まで全国  
反核医師の会主催の

「日韓反核医師交流の旅」に参加した。

参議院選挙期間中であり、選挙結果が今後の原発政策に大きな影響を及ぼすことを考えれば、韓国に行くよりも国内で原発廃止の世論を高める取り組みをすべきだと考え、当初は参加を予定していなかった。しかし、その後、橋下大阪市長が従軍慰安婦は必要だった等と発言し、日韓関係のさらなる悪化が懸念される事態となった。私は、韓国に関心があり、これまで歴史についても学んできた。また、韓国語も勉強し、ある程度は会話もできる。この旅行に参加して、原発反対の思いを共にする韓国の医師と交流したいの思いと同時に、日本にも歴史を学び友好を求める医師、市民がいることを伝えたいと考え、締切りぎりぎり参加を申し込んだ。

韓国には現在21基の原発があり、さらに試験運転中、建設中、建設予定の原発が10基あり、世界でも最も急激に原発を増やしている国である。原発は4か所に集中して作られ、プサンなどの大都市から近距離に作られていることも大きな特徴である。原発の危険性について市民にあまり知られていないことがその要因の一つと考えられる。しかし、視察の前に、原発に規格外の部品が使われていたことが判明し、複数の原発が稼働停止している状態であり、市民の関心も

高まりつつある時期であった。

関空から、プサン、キメ空港に到着、現地でも東京、福岡からの参加者と合流、日本からはスタッフを含め24名の参加であった。バス内で昼食をとりながらウルソン原発に向かった。バスには、韓国の原発に反対する医師の中心的存在である、キムイクチュン医師が同乗、この後も3日間行動を共にしていただいた。日本でいえば大阪に相当するような大都市であるプサンや古都キョンジュからすぐ近くに原発があることを実感し、驚いた。ただ、残念ながら、高速道路の渋滞の影響で原発への到着が遅れ、十分な見学の時間がなく、見学したのもタービン室のみで、質疑の時間も全くなかった。原発の担当職員は、大変腰が低く、丁寧な対応ではあったが、問題なく見学を終わらせたいという姿勢を感じた。

その後、ポハン市に移動、教会の講



ソウル大学での学習交流会

堂で、広島島の青木医師が講演を行った。たくさんの方が出席されていたが、残念なことに私たちの到着が1時間遅れ、また、青木医師に市民向けの講演だと言うことが伝わっておらず、医師向けの講演を準備されており、集まっていたいただいた韓国の方々が大変申し訳ない思いをした。韓国でも原発の問題に関心を寄せる市民の方が多いことに、勇気と励ましをいただいた。

2日目はキョンジュ市内を短時間でソウルへ移動。駅からソウル大学医学部に向かい、青木医師の講演と韓国の市民運動家、カンヘジョン氏の講演が行われた。会場には、韓国の若手医師や学生数十名が集まっており関心の高さを感じた。青木医師は福島

の放射能汚染の状況と小児の甲状腺健診の現状を中心に話されたが、通訳を介しての講演の上、地名や線量等の基礎知識のない韓国の人たちに十分に伝わらなかつたのではないと感じた。カン氏の講演は、韓国人参加者に向けて、インターネット等の情報をもとに福島原発事故による健康への影響を述べたものだが、日本からの参加者でも知らない内容も含んだ大変詳しい報告で、その努力に感銘を受けた。この講演会でも、時間がなく十分に論議の時間が取れなかつたことは残念であった。

その後、韓国の参加者を交えての夕食会となった。幸い、私はある程度韓国語ができるので、移動中のバス内や夕食会場で、韓国の参加者と交流することができた。精神科医、麻酔科医、韓方医、環境運動の活動家といった人たちであった。韓国での市民の原発への見方の変化やマスコミの状況、医療の状況等、知ることができた。

3日目は、2時間ほどの観光の後、昼食、帰路についていたが、この日から韓国の緑色（ノクセク）病院理事長であるパクヒョンソ氏が同行してくださった。氏は83歳で、植民地時代の教育の影響で日本語が堪能である。韓国の独立記念館の展示の監修にも当たられた著名な歴史学者であり、民主主義と平和を求める運動に関わってこられ、貧しい人たちも必要な医療が

受けられるようにと緑色病院の設立にも関わってこられた。日本の平和憲法に連帯する韓国の市民団体「9条の会」の顧問でもある。パク氏からは、昼食時に、帰つたら参議院選挙で良い結果が出るようにがんばってくださいと励ましの言葉をいただいた。

3日目の観光は、当初は、西大門独立公園や安重根記念館等、日韓の歴史に触れられる施設の見学を予定したが、残念なことにいずれも月曜日が休館で、断念することになったと言う。

私にとってこの旅行の最大の成果は、韓国にも原発に反対する人たちが平和を求める人たちがたくさんおり、どんなに日本の政治家の問題発言などで日韓関係に問題が起こっても、その人達とは何のわだかまりもなく交流できると実感できたことであつた。

ただ、旅行全体としては「交流」できる部分が少なく、言葉の問題があつて日本からの参加者の多くは韓国人の人たちと触れ合うことがあまりできなかったのではないかと。また、同様な機会があれば、お互いにもっと交流が深められる内容にしてもらいたいと考える。

最後に、平日も含めた日程でもあられるのかかわらず、旅行に同行していただいたキム医師を始め、今回の企画に関わっていただいた韓国の方々、また、日本の関係者の方々に深い感謝の意を表したい。

## 「反核医師医学者のつどい」2013 in 北海道に参加して

大津市 東昌子



9月21日から22日、  
滋賀県反核医師の会  
と滋民医連から派遣

され、札幌でのつどいに滋賀から1人で参加した。今回は全国から90人の医師、歯科医師と29人の医学生を含む211人の参加者で盛会であった。

今集会には広島市長、長崎市長、原水協、被団協、国会議員からのメッセージが寄せられた。

①記念講演は、元スイス大使村田光平氏。政府中枢部にいて総理大臣、外務省へも親書やメッセージを送れる立場にいる公人として、福島原発事故問題での情報発信を続けてきた、このような人がいたことにまず驚いた。原発事故の解決に程遠い現実

の中のオリンピック招致、安倍首相のあまりにも危機感のなさ、事故矮小化の戦略に果たしているメディアの本質、東電と政府の事故処理が破綻していること、福島原発事故の原因は地震であり現在の安全基準の見直しが必要で日本で原発を動かすこと自体があり得ないと断言。原発は存在自体が安全保障の問題であり、事故処理が破綻していることを認め、国策化と国際化し、事故の解決のために人類の叡智を動員すべきと提唱。

唱。国連倫理サミット開催に尽力、倫理の確立と母性文明、民事軍事を含む真の核廃絶(三位一体)を提唱。反核医師の会が核兵器廃絶と平和利用原発問題に共に取り組んでいる立場を評価していると。非常に明解な話であった。福島原発事故後、ドイツが原発廃止へと政策転換を決めた際にも、倫理的問題との判断であったことを想起し、国際的にみれば原発を経済からみている日本経済界、政界の異常さを理解できた。村田氏が一貫して問題視している福島原発第4号機が再び地震に見舞われ、ジルコニウム火災が起これば現時点で何ら対策が取られておらず東京に人が住めなくなるという点に関しては、私はこれまで不勉強であったが、事態の深刻さを思い知らされた。

②教育講演は「核兵器廃絶への道すじ」と題して黒澤満氏(大阪女学院大学教授)と中村桂子氏(長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授)が講演。核兵器のない世界を目指した最近の世界の動きや、核軍縮が人道的次元、核兵器の非人道性の考慮に至っていることを学んだ。唯一の被



全国から集まった医学生たち

爆国として被ばくの実相を発信してきた日本国民としては、今頃なぜこの思いもしたが、生物兵器、対人地雷、化学兵器、クラスター爆弾を人道的アプローチから国際的に廃止してきた人類が、やっと次は核兵器の廃止という段階に到達したということ。2010年NPT再検討会議最終文章に核兵器の非人道性が言及されたことの意味が理解された。核兵器の非正当化、核抑止力という点で

の有用性の排除において、非核保有国の果たすべき役割の重要性が増してきている。この流れの中で、2013年4月のNPT準備委員会での核兵器の人的影響に関する共同声明に日本政府が反対。日本が公式政策として核兵器への依存(核の傘)を謳っていることが、オバマ政権の核兵器廃絶への姿勢に反対する勢力がオバマを批判する根拠となっていると指摘された。日本国民として政府のあり方を変えることが、世界から核兵器をなくすことにつながるという指摘に、責務を感じた。

長崎大学に核兵器廃絶研究センター(RECNA)が2012年4月に発足し、次世代の育成、市民のシンクタンクとして活動しているということを私は初めて知った。グローバルに世界を見ること、核兵器の被害と原発事故を経験した日本の国民とし

て、世界に果たすべき役割を教育を通じて次世代に継承していくこと、RECNAの活動に光明を見た気がした。

③分科会は被ばく問題に参加。パネリストは、長崎で黒い雨が降った地域で開業し患者の半数が被爆者という本田孝也氏(長崎保険医協会)。福島とチェルノブイリを行き来しながら被ばくの実態解明、汚染水海灣調査にも取り組む木村真三氏(獨協医大准教授)。数多くの患者の放射線治療にあたってきた経歴から内部被ばく問題に積極的に発言している西尾正道氏(北海道がんセンター)。

討論では福島県民健康調査での子どもの甲状腺がん発見について、発症率をどう考えるかについて、パネリストの中でも熱い討論がなされた。

原発事故後2年というタイミングでのがんの発見を、放射能被害とは関係ないスクリーニング効果と福島医大、国は断言しているが、断言はできない。今後晩発性発症に対しても注意し、検査体制と手術・治療の体制を整えていくことが急務ということが落としどころであった。

集会全体を通して、核兵器と原発の廃絶に向けての確信を得ることができた。核廃絶のために国際社会が確実に動いていること、唯一の被ばく国の国民として国際社会における責務を果たすためには、まず核抑止力

## 講演会

# じわじわと命を蝕む

## 低線量・内部被曝の恐怖



講師 肥田 舜太郎

肥田舜太郎という内科の医者です。広島に原爆が投下された時、現地にいて自分も被曝しました。生き残って被爆者の方の救済のための医療活動を行った方はたくさんおられましたが、みんな私より年上で、すでに亡くなりました。結局私が広島で生き残った、たった一人の被曝医師ということになるようです。

被曝した時私は広島陸軍病院という日本で一番大きな陸軍病院に勤務していました。東京や大阪や福岡や神戸、日本中の大都会は戦争が激しくなると、みんな空襲を受け、木造の日本の家屋はほとんどが焼けてしまつて、大都市は焼け野原になりました。

### 広島が空爆されなかった理由

私は原爆が落ちる1年前の8月1日に広島に着任しました。原爆投下までの1年間は広島も他所の町と同じように毎日朝から夜遅くまで何回もB29というアメリカの爆撃機が飛

下で火傷をして多くの人が焼け死にました。また爆風が強いから、上空で爆発した爆風が真下へ流れて、木造の家はぺちゃんこにつぶれました。中にいた人は逃げる暇もなく即死でした。即死しなかった人は動けないで苦しみながら焼き殺されました。それが目に見える被害です。ところが、放射線による死は目に見えません。

僕たちがあの爆弾が原爆だったと聞いたのは、8月6日から10日ほど経つてからのことでした。でも、原子爆弾というものがどういうものか全然わからない。ただ不思議な死に方をする人をたくさん見ましたから、原子爆弾に当たると人間はこういう風に死んでいくんだということを経験で学びました。

放射線は目に見えません。だから、今でも福島の人たちはどういふ被害を受けて、これからどうなっていくのかわからないわけです。わかつたような顔をした専門家が証拠も挙げないで「心配はない。安全だ」と言っています。これから本当の被害が起きてくるのです。それを予想すれば、日本中の医者が態勢をとっておかなければ、患者が始めてからでは対応できません。今そういう態勢、準備は何もしていません。

日本人は、広島と長崎で何十万という人間が67年間にわたって放射線で殺されてきたのに、その経験を少し

論が国際的には過去のものとなりつつある論理であることを国民に知らせ、世論を動かし政治を動かしていくことだと学んだ。国内メディアが操作された情報しか流さない中で、国際情勢を正しく知るには努力がいること、長崎大学の核廃絶研究センターのような調査・研究と人材育成に取り組む拠点ができていること、今集いに医学生が多数参加したことに、未来への希望を感じることができた。福島原発事故では専門家と言われる御用科学者が出してくる数字のマジックを元に国民を欺いている原子力ムラの論理に対し、自分で調べたデータをもとに真相に迫る努力をしている医学者、医師の姿に大変励まされた。直前にあったオリンピック招致の安倍首相プレゼンについて、会議で何人からも怒りの声があげられ、事実を曲げる勢力に対し我々の運動に火がついた感じがした。

今後の課題としては、2015年NPT再検討会議(4月―5月)に向けた準備会議の動向に注視し、運動をプランすること。医学生や若手職員の研修にRECN Aの情報を活用すること、原発問題では汚染水問題に全力を挙げるよう国に迫り、原発再稼働を許さない活動に尽力すること、当面10月6日の菅谷講演会を成功させ今後も市民向け講演会で世論を喚起していくことが大切と感じた。

も学ばないで「放射線は安全だ。人間の身体に害なんか与えない」というアメリカの言い分を信じて、のんきに構えている。放射線の被害は、67年経った今日も爆弾が落ちた時と同じように、診断もつかなければ、治療法もないから見ているよりしようがない。

僕たちは毎日広島でそういう経験しました。自分の診ている人間がなぜ死ぬのがわからない、医者として死んでいく人を何かして助けたいのに、ウロウロするだけで、最後は死亡を確認するだけでした。

爆心地から1〜2キロぐらいまでは直接放射線の影響で死ぬ人が多かった。私はたまたま6キロ離れた村に往診に行っていて病院にいなかったから命は助かりましたが、6キロ離れていても、爆発した瞬間のピカッという光と熱は感じました。その熱さだけは今でも覚えています。火傷はしませんでしたが、あと2キロ近かったら焼けていました。どこか近くに爆弾が落ちたと思いました。だから、次にまたドカンという衝撃がくるだろうと思つて伏せていました。ところがいつまで経つてもドカンがありません。おかしいと思つて様子を見て初めて、原爆が爆発した後、空にどんなものが見えるのかを見ました。これを見て喋れる人はほとんどいません。なぜならその様子を見た人はみんな死んでいきますから。

### 広島島の青空に閃光と衝撃波が

その日広島島の空は青空でした。その青空に真っ赤な火の輪ができました。その赤い火の輪を不思議そうに身動きしないで見つめていたら、輪のど真ん中の青空に真っ白な雲ができて、それが大きく膨らんだ。最初にできた火の輪はそのままです。中から膨れていく雲がだんだん大きくなって、その火の輪の内側にくっ付き、ちょうど火の輪の直径の大きな火の玉になりました。これが原爆の後の火球(かきゅう)で、直径7キロだそうです。大きいし、不思議だし怖い。初めは縁側で楽な姿勢で見えていたのですが、座り直して何が起こつてもすぐ逃げ出せるようにと覚悟しました。そうしたら、その火の玉が雲になつて限りもなく上つていきました。

今度は下の方を見るとキノコ雲がありました。みなさんがよく本などで見るキノコ雲の写真は下から白い雲になつていますが、あれは時間が経つてから撮った写真です。僕が見た時には下は火柱でした。その火柱の上に輪があつて、それが火の玉になつて、上がぎのこ雲になつている状態でした。不謹慎な言い方ですが、その火柱は五色に輝いて赤、黄、緑がチカチカしてきれいでした。それをしばらく見ていると、火柱の一番下の向こうから横に長い真っ黒な雲が出て、広島島

流れる太田川の谷にいっぱい広がりました。その真っ黒な雲が渦を巻きながら押し寄せてきて、「ああ、もう来る」と思ったら、村の向こうにある小山の頭へ上りだし、2階建ての小学校の屋根の瓦をまるで紙吹雪のようにブアーッと舞い上がらせました。それが僕の見ただ最後で、雲の塊が僕の所にきて足元をすくわれて、うちの中に飛ばされました。



私が飛んでいた時間は1秒か2秒ですが、それをものすごく長く覚えている。舞い上がった目の前に天井があつて、「ああ、天井だ」と思ったら、それが風で吹き抜けて、藁葺の屋根が舞い上がつて、青空が見えたと思つたら、向こう側の家の壁に叩きつけられました。同時に上から屋根が落ちてきて、赤ん坊と2人、その下敷きになつて、泥の中に埋もれました。私は泥の中から跳ね起きて、赤ん坊を引張り出しました。辺りは真っ暗でしたが、何とか表に出て、6歳の男の子も助け出しました。赤ちゃんと男の子が生き延びたことを確認した後、自転

### 初めて見た被爆者

車を借りて、山を駆け下り、村の中を病院に向かって走りました。途中何が起こつたのかわからない村人が騒いでいましたが、すぐに広島市内に向かいました。

その途中、街道の真ん中ぐらいいで、広島から逃げて来た最初の被爆者に会いました。8月ですから着ているものが白はずなのに上から下まで真っ黒です。変だなと思いつつだんだん近づくと、着ているものが襤褸(ぼろ)なんです。もつと近くなると頭の毛があるのかないかわからない。丸い顔に大きな饅頭のような目があつて、鼻はなく、顔の下半分は全部口という人間が、「ウツ、ウツ」と唸りながら、手を前に突き出してやってくる。人間だとは思えない。「助けて」としがみ付かれたら怖いから、そこに自転車を捨てて、本人が飛びかかっても届かないように後ろの方へ下がつて待っている。その人は僕の自転車に蹴躓いて僕の方へ手を伸ばしながらベシヤッとそこに倒れた。「ああ、この人は生きて人間だった。ごめんさい」とそばへ走つて行って、「しつかりしてください」と言つて触ろうとしましたが、全部焼けていて触るところがない。背中を見ると、泥や埃が付いて真っ黒で、小さなガラスがいっぱい刺さっていました。しょうがないから立つまま声

だけで「もうちよつと行けば村があるから、そこへ行ったら助けてくれる。もうちよつと這って行きなさい」みたいなことを言いました。そしたら煙轡を起こして、それがその人の最期でした。

その人は被爆して7キロ道路を歩いた後死にました。これが僕の見た、広島で焼け死んだ最初の人でした。恐ろしかったです。手を合わせて自転車にまたがると、道の向こうから同じような人がいっぱい来るんです。立つて来る人もいれば這っている人もいますが、みんな焼けただれている。その中を進めるわけがない。しょうがないので、8メートルほど下の太田川に目をつぶって飛び降り、川の中を広島に向かつて歩きました。

広島市に近付くと、真つ黒な煙が川を這うように上がってきました。何百軒という家が燃えているので暴風のような風です。辺りは真つ暗で何も見えない。本当なら、後ろを向いて逃げたいけれど、軍人だから行かなければならない。ようやく病院の近くまでたどり着いて土手を登ろうとしたら、土手の上の家が燃えていて、窓から人が川へ飛び込んでいます。先に落ちた人はそこでもう死んでいて人間の土手になつている。その上にまた落ちてくるので、跳ねて私のいる川の中へドボンと落ちてきます。落ちた人はみんな一生懸命起き上

がつて、もがいて、向こう岸へ逃げる。私は結局登れなくて、上から落ちて死ぬ人をしばらく見ていました。人間というのはおかしなものでね。私は聴診器も薬もないのに医者である自分はこのから去つてはいけないと思ひました。でもしばらくして「今お前がこんな所に立つていたって、できることは何もない。村へ引き返して、これから逃げてくる人々を村の人に手伝ってもらいながら、助けるべきだ」と閃いたんです。それでもすぐには立ち去ることができず随分そこにいましたが、「さよなら」と言つて、手を合わせて村へ引き返しました。

村に帰る途中、大勢の人が死んでいました。その上を踏まないように気を付けて、やつと村に入りました。小学校の校庭には一目で1000人ぐらい逃げて来た人が寝ていました。何人か座っている人はいましたが、立っている人は1人もいません。

記録をとつていたのですが、最初の日が6700人、翌日が1万2000人、その翌日の8日が2万2000人、9日の朝が2万7000人でした。もちろん目勘定ですから正確ではありませんが、村は超満員です。そんな中、最初の3日間の仕事は死亡確認だけでした。薬もないし治療のしようがない。みな体中やけどしていて、どの人も助かりつこないとわかつていました。

● ● ●  
原爆から4日目の8月9日の朝、初めて火傷以外で死ぬ被爆者を見ました。

8日の夜中に、九州と四国から応援の医療班がたくさん来ました。看護婦さんと戦地で医者の代わりに弾を抜いたりする心得のある兵隊さんである衛生兵が合わせて150人ぐらい来ました。お医者さんも20何名、村に来てくれて大助かりでした。彼らは夜中に着いて、朝から表に出て、道路に寝ている人をみんな診てくれたのですが、40度の発熱がある人がたくさんいました。内科ではめつたに40度を超える患者を診ることはありません。マラリア患者が、40度を超えることがたまにあります。火傷している被爆者がなぜそんな高熱を出しているのかわからない。1人2人診て扁桃腺が腫れていれば、みんなそうだと思おうと考えて、最初の1人を診ようと思いました。最初の1人を診ようとして、自分も頬つぺたを地べたに付けて患者の口に近づくと異常に臭い。腐臭がする。

口を開けて、中を見ると、上顎も歯茎も舌も全部真つ黒でした。それが腐臭を放っている。頭を触ると、髪の毛がスツと取れるんです。普通剃つたあとには毛根という細胞が残っているのですが、青くなりませんが、被曝した人たちは毛根細胞まで一緒に取れたから、真つ白です。こんな毛の抜け方は初めて見ました。それが原爆の影響による急性症状でした。

もう1つ、これは患者から教わったのですが、口が聞けない状態の寝ている患者が「ここを見ろ」と自分の肘の裏側を差し出しました。そこに紫色の斑点がたくさん出ていました。これも初めて見ました。

医学部にいる時に「諸君はこれから医者になつて、一生の間何千人と患者を診るだろう。それでも、それ」を診ることができるとは、諸君の中で半分ぐらいだろう」という話をされました。それは白血球とか、血小板減少性貧血症といった血液の病気です。だいたい助かりません。そういう病気で入院した患者が、危篤になつて、あと2、3日で死ぬという時に紫斑が出る。という講義を思い出しました。あの先生が言っていたのはこれだなと。なんでもこの患者にそれが出るかは、もちろんわからない。高熱が出る、臉から出血する、口が腐る、髪の毛が抜ける、紫斑が出る、この5つが原爆の放射能の急性症状だったので。大学で生徒

に教える医学書に放射線の急性症状として、この5つが今でも書いてあります。

患者の中に自分で「私は原爆にあつておりません」という者がいました。その男は50キロ離れた福山の部隊の兵隊さんで直接は被爆していませんでした。

しかしその人がいた部隊は、8月7日には被爆者の救援のために広島市に入っていました。当日と翌日、丸2日2晩、持つて行った乾パンを食べ、水は市内の民間の水道から水を飲みました。水源地が被曝していましたが、みんなそれを飲んで被曝したのです。

9日の朝、その男の人は疲労と脱水症状で意識がなくなつて倒れました。それで僕がいた戸坂村に連れてこられたのです。僕は「ピカにあつたら人間など診る暇ない」という気持ちでよく話も聞かないで違う患者のところへ行つてしまつたのですが、3日ぐらい経つてから「ピカにあつていないと言つていた兵隊はどうしたのか」と思ひ出しました。当然どこかへ帰つたと思つていたのですが、「死にました」とのこと。「被爆もしていないし、「元氣に話していたのになぜあの男が死ぬのか」と不思議でした。周りの人が言うには、ここで死んでいく被爆した人間と全く同じように目から血が出て、熱が出て、口が腐つて、髪の毛が抜け、

紫斑が出て死んだとのこと。最初本能的に思つたのは、この病氣は伝染するということでした。しばらくして院長が大阪から帰つて来て、僕の所見を話しました。すると「伝染病なら大変だからお前が確かめろ」と言われました。どうやって確かめよう。検査の道具も何もない。結局死骸の1つを夜中に内緒で解剖して、腸の中を調べました。伝染病なら腸管伝染病の所見が必ずあるはずでした。ところが腸管伝染病はみつかりませんでした。それで確信を持つて、少なくとも伝染病ではないということに対応しようと決めました。

### ぶらぶら病とくつ内部被曝

ところが、被爆をしてないという人間が、どんどん後から逃げて来ました。みんな直接の被爆者と同じ症状です。いろいろ話を聞くと、かつたるいというだけです。ただあの爆弾が落ちた後、町を歩いて家族を探している、昨日までは元氣に歩いていたのに、今日になったらもう起き上がつて歩けない。何が起つたか自分ではわからない。ぶらぶら病の症状です。

ぶらぶら病の病氣を初めて聞いた時、その症状は「かつたるい」ということでした。アメリカへ行つて、アメリカのぶらぶら病の患者を何人も診ました。言つていることは広島の人間と同じです。原因は、兵隊の時に陸軍の中

枢に召集されて、自分の部隊がある核実験に動員され、その爆弾が爆発する時に演習場にある壕に隠れていた。終わつたら壕から出て、もうもうと放射線の埃が舞う中へ入つて被曝をしていました。そのまま2年3年勤めて、除隊になつて家へ帰ると変な病氣が出てくる。かつたるくて動けない。お医者さんに掛かつて、何だかわからない。そういう患者を何人も診たお医者さんなら核実験に立ち会つたということが共通項にあると考えますが、兵隊はそれぞれの地域に散りますから、1つの町でそういう兵隊を何人も診る医者がいまません。患者が少なくてわからない。政府は、あまりそういうのを研究すると言つて被曝の仕方は内緒にしているわけです。

### ● ● ●

9月2日にマッカーサーが兵隊を連れて厚木に上陸しました。「今日からは、天皇でも総理大臣でもない、全てマッカーサー將軍の命令で生きるんだ。その命令に違反したら、厳罰に処す」と占領軍が武器を持つて言いませした。マッカーサーは日本人に「原爆を受けて広島と長崎の市民には、たくさん人間が死んだり、怪我をした。今も具合が悪い人がたくさんいるだろう。その人たちが自分の身体に受けた被害は、例えその内容が何であれ、全部アメリカの軍隊の機密である。原爆がどのように爆発し、どんな

ふうに雲が上がつたかを絶対話してはいけない。原爆だけではなく、その被害を受けた人間にどういう症状があつたのかを例え自分の親でも言つてはいけない」と言いました。進駐軍というのは、みんな怖いから、その大將がそう言うから、誰も何も言わなくなりました。

もう1つ、日本の医者、医学者、大学教授、そういう連中に対しては「諸君には、広島・長崎で原爆に遭つた人間が診察を求めらるだろう。ただ、診た結果をカルテに詳しく書き残してはいけない。わからないことを仲間の医者に話したり、論文に書いて学会に出したり、研究してはいけない」ということでした。

医者は患者に症状を聞きます。患者は広島で被曝したと言いかける。すると「それは言わないでください。もし私がそれを聞いたことがわかれば、私は進駐軍の憲兵から睨まれます。私はあなたの話をお聞かせにしません」という、被爆者が被害の状況を医者にも言えないという状態が、進駐軍が帰るまで7年間続きました。アメリカの軍隊に戦争直後占領されて、他国の軍隊の政治の下で暮らした7年間が日本にはあるということ。を全く皆さんは知らずに今日までできたのです。7年経つてアメリカが帰つた瞬間に、日本政府は、国民に一言の相談もなく安保条約という条約を結

んで、無制限に日本の土地をアメリカ軍が基地に使ってもいいということになりました。その費用は日本人の税金で賄っている。保育所が足りない、学校教育を充実させてほしい、年寄りが安心して住める場所がないなど、みなさんにはたくさんさんの要求があるというのに。

### 新たな「ヒバクシャ」を出さないために核兵器廃絶を

既に皆さんは滋賀県にいても、福島で出た放射線をだいぶ吸い込んだり、食べたりして、身体に入っている。だから僕等から言わせると、片仮名の「ヒバクシャ」なんです。それから逃れて真っ白な身体です、なんて言う人は、僕はこの中に一人もいないと思っています。そうである以上皆さんは、今、福島にいる人たちと同じように、量は少ないけれども放射線が入っている。放射線は体内に入った場合、量の多少にかかわらず有害です。

政府とアメリカは、体内に入った放射線は量が極めて少ないから、人間の身体には無害であると盛んに宣伝をする。戦後、世界中で原発を作り原爆を作ったとき、福島の実情が、これから起こることが、世界にわからないう体制を作るために、外国の核を支持する勢力がたくさん日本に来ています。中心はほとんど全部福島に入っています。「心配ないよ」「福島のことはいもう

終わつたんだ」福島の人を一生懸命教育しています。それ程、日本人の福島への被害は、世界中の人がこれから放射線に対する理解の上で大きな課題です。この真実がわかることが非常に怖い。だからアメリカと核兵器を持っている国の指導者は、必死になつて福島の実情を知らせないよう努力をしている。体内に入った放射線の影響力がわかると、原発を続けたり、原爆を作ることができなくなる。原子力を持つている、作つて飯を食っている勢力は、世界中で一番金持ちの勢力です。だから逆に皆さんは、向こうが隠すのなら何を隠しているかをこれから一生懸命勉強してください。

福島ではたくさんの人や子どもが放射線を身体に浴びながら、これから出てくる放射線の被害を恐れて、どうやって生きるかと真剣に悩んでいます。だから、私が呼ばれるのです。呼ばれた専門家の中に言つた通りできることを言う人は誰もいません。言うのは「ここに住まないように」、あとは「悪いとわかつたものは食べないように」「汚れてない物を食べなさい」と言うだけです。そんなことをそれぞれがの所帯がこれから毎日「じゃあどうしたら良いんですか」と聞くと、それには答えはない。

放射線との闘いは出る元を止める、これが原則です。だから被爆した人だけじゃなくて、日本人の女性も

男性も年寄りも若者も一緒になつて、53の原発の火を止める。アメリカが持つてきている核兵器は、全部持つて帰つてもらおう。この2つを日本中の人間がみんなやる。

あとは、自分の命は自分で守る。80歳だろうが、10歳の子どもだろうが健康で生きられることだけを教えてもらつて、どんなに辛くてもそれを守る、自分の命を守つて生きる。放射線の影響に対して効くものは一つもないのだから。皆さんが毎日、いろんな薬を買つて飲んでいますが、そんなことをするよりも、毎日の生活を病気になるないように工夫をして昔から長生きしてきた年寄りが「こういうことをしてきたよ」ということを学ぶ。

まずは早寝・早起き。太陽と一緒に目を覚まし、太陽と一緒に働く。皆さんの免疫はそういう生活の中で作られてきたのだから、夜ふかしをしてその免疫の力をむだにしてはいけません。朝早く起きて、暗くなつたら適当な時に寝る。そうすると、何をしてもいかわからなかつたお母さん方は、それをやれば長生きできると聞いただけで生きていく自信がでるのです。

私が受付で本にサインをしていると、「ここへ来るまでは、明日が真っ暗だつた。でも、自分が頑張れば道が開けるといふことがわかつた」と言つて明るい顔になつてみんな帰つて行きませう。無理なことはせず、自分のできる

ことを一生懸命やればいい。

長生きしている人に話を聞くとみんなが言うのはやっぱり早寝・早起きです。それから食べ過ぎないこと。僕は小さい時から粗食が身体に合つていたんです。だから健康なんです。よく何を食べたらいいかという質問がですが、人間が食べてきた物は、毒以外みんな良いんです。いけないのは食べ方です。食は人間にとっては本来休息の時間ですが、そういう意識を持つた人はあまりいません。昔は自分の食べ物自分で探さなければ食べられませんでした。どんなに身体が悪からうが、年取ろうが、食べる物は自分が取つてきて食べた。だから、みんな休息をとりたくてもみんなが働いているときに勝手に休むわけにはいけません。だからみんなが腰を下ろして物を食べる時が1番の休息の時間だったので。昔は食べることに休息が、一つだつた。それは今でも同じですよ。朝・昼・晩3食、食べようと思えばその時間ゆつくり休む。食べる時はどんなに腹の中がむしゃくしゃしてようと、ニコニコ笑つて相手を楽しませて一緒に飯を食う。それが健康のために1番良い食べ方であつて、それを心掛けてください。

● ● ●  
まとめは1つしかありません。皆さんはあと何年生きられるかわかりませんが、これから生まれてくる子ども

やひ孫、玄孫は、この世の中にきれいな海があり、きれいな森があり、きれいな水があり、美味しいものがあると、思つて生まれてきます。空気も水も食い物も悪い世界に生まれさせたら可哀想じゃないですか。この子たちには汚れた物は何も与えない。自分たちがきれいにしてから死ぬ。これがこれからの皆さんの任務です。だって、戦後こういう世の中を作ったのはあなた方なのだから。

知らないとはいふものの、原爆を浴びた経験を持ちながら、外国の人がびつくりするような、53基もの原爆をなぜ日本人は造つたのか。

今日僕の話聞いたのだから、明日からこの国をきれいにするために自分の残つた命を一生懸命使うと約束してください。だって、やれる人は皆さんしかいない。そう思つて、この国をきれいにする、原爆を止める、核兵器を持つて帰らせる。それを成し遂げるのが生き残つた大人の、自分たちの子ども・孫に対する責任です。

明日からの自分の余生を自分たちの子孫のために少しでも良くして死ぬというつもりで頑張つてください。これが私のまとめです。どうもありがとうございます。とうございしました。

(この講演録は2012年10月8日、滋賀県保険医協会主催、核戦争防止滋賀県医師の会後援で開催された内容をまとめたものです)

## 会員・賛助会員募集のご案内

### 核廃絶へ向けて医師としての役割を果たそう

私たちは、命と健康を守る医師として、日々、保健・医療・福祉の活動に従事していますが、この核戦争防止の活動は、地球を、命を、核汚染から守る最も基本的なことから一つであると考えています。皆様のご入会は、一人一人は小さな力であっても、多くの人々を動かす力となります。ご賛同いただける方のご入会を心から願っています。

**会費** (年額) 医師・歯科医 5,000円 医学生・賛助会員 2,000円

**連絡先** 〒520-0047 大津市浜大津2丁目1番36号 フコク生命ビル8階  
電話 (077)522-1152 FAX (077)525-3093

・入会ご希望の方は、入会申込書の会員区分のいずれかに○印をつけ、必要事項をご記入の上、本会宛に郵送またはFAXでお送り下さい。

## 核戦争防止滋賀県医師の会 入会申込書

年 月 日

核戦争防止滋賀県医師の会 御中

貴会の趣旨に賛同し入会を申し込みます。

**会員区分** 【開業医、勤務医・医学生、賛助会員】

(フリガナ)

**氏名** \_\_\_\_\_

**通信連絡先** 〒 \_\_\_\_\_

**TEL** \_\_\_\_\_ **FAX** \_\_\_\_\_

## 広島平和宣言

「あの日」から68年目の朝が巡ってきました。1945年8月6日午前8時15分、一発の原子爆弾によりその全てを消し去られた家族がいます。「無事、男の子を出産して、家族みんなで祝っているちょうどその時、原爆が炸裂(さくれつ)。無情にも喜びと希望が、新しい『生命(いのち)』とともに一瞬にして消え去ってしまいました。」

幼くして家族を奪われ、辛うじて生き延びた原爆孤児がいます。苦難と孤独、病に耐えながら生き、生涯を通じ家族を持たず、孤老となった被爆者。「生きていてよかったと思うことは一度もなかった。」と長年にわたる塗炭(とたん)の苦しみを振り返り、深い傷跡は今も消えることはありません。

生後8か月で被爆し、差別や偏見に苦しめられた女性もいます。その女性は結婚はしたものの1か月後、被爆者健康手帳を持っていることを知った途端、優しくった義母に「『あんた一、被爆しとるんね一、被爆した嫁はいらん、すぐ出て行け一。』と離婚させられました。」放射線の恐怖は、時に、人間の醜さや残忍さを引き出し、謂(いわ)れのない風評によって、結婚や就職、出産という人生の節目節目で、多くの被爆者を苦しめてきました。

無差別に罪もない多くの市民の命を奪い、人々の人生をも一変させ、また、終生にわたり心身を苛(さい)いなみ続ける原爆は、非人道兵器の極みであり「絶対悪」です。原爆の地獄を知る被爆者は、その「絶対悪」に挑んできています。

辛く厳しい境遇の中で、被爆者は、怒りや憎しみ、悲しみなど様々な感情と葛藤(かつとう)し続けてきました。後障害に苦しみ、「健康が欲しい。人並みの健康を下さい。」と何度も涙する中で、自らが悲惨な体験をしたからこそ、ほかの誰も「私のような残酷な目にあわせてはならない。」と考えるようになってきました。被爆当時14歳の男性は訴えます。「地球を愛し、人々を愛する気持ちを世界の人々が共有するならば戦争を避けることは決して夢ではない。」

被爆者は平均年齢が78歳を超えた今も、平和への思いを訴え続け、世界の人々が、その思いを共有し、進むべき道を正しく選択するよう願っています。私たちは苦しみや悲しみを乗り越えてきた多くの被爆者の願いに応え、核兵器廃絶に取り組むための原動力とならねばなりません。

そのために、広島市は、平和市長会議を構成する5,700を超える加盟都市とともに、国連や志を同じくするNGOなどと連携して、2020年までの核兵器廃絶をめざし、核兵器禁止条約の早期実現に全力を尽くします。

世界の為政者の皆さん、いつまで、疑心暗鬼に陥っているのですか。威嚇によって国の安全を守り続けることができると思っているのですか。広島を訪れ、被爆者の思いに接し、過去にとらわれず人類の未来を見据えて、信頼と対話に基づく安全保障体制への転換を決断すべきではないですか。ヒロシマは、日本国憲法が掲げる崇高な平和主義を体現する地であると同時に、人類の進むべき道を示す地でもあります。また、北東アジアの平和と安定を考えると、北朝鮮の非核化と北東アジアにおける非核兵器地帯の創設に向けた関係国の更なる努力が不可欠です。

今、核兵器の非人道性を踏まえ、その廃絶を訴える国が着実に増加してきています。また、米国のオバマ大統領は核兵器の追加削減交渉をロシアに呼び掛け、核軍縮の決意を表明しました。そうした中、日本政府が進めているインドとの原子力協定交渉は、良好な経済関係の構築に役立つとしても、核兵器を廃絶する上では障害となりかねません。ヒロシマは、日本政府が核兵器廃絶をめざす国々との連携を強化することを求めます。そして、来年春に広島で開催される「軍縮・不拡散イニシアティブ」外相会合においては、NPT体制の堅持・強化を先導する役割を果たしていただきたい。また、国内外の被爆者の高齢化は着実に進んでいます。被爆者や黒い雨体験者の実態に応じた支援策の充実や「黒い雨降雨地域」の拡大を引き続き要請します。

この夏も、東日本では大震災や原発事故の影響に苦しみながら故郷の再生に向けた懸命な努力が続いています。復興の困難を知る広島市民は被災者の皆さんの思いに寄り添い、応援し続けます。そして、日本政府が国民の暮らしと安全を最優先にした責任あるエネルギー政策を早期に構築し、実行することを強く求めます。

私たちは、改めてここに68年間の先人の努力に思いを致し、「絶対悪」である核兵器の廃絶と平和な世界の実現に向け力を尽くすことを誓い、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げます。

平成25年(2012年)8月6日

広島市長 松井 一實

## 長崎平和宣言

68年前の今日、このまちの上空にアメリカの爆撃機が一発の原子爆弾を投下しました。熱線、爆風、放射線の威力は凄まじく、直後から起こった火災は一昼夜続きました。人々が暮らしていたまちは一瞬で廃墟となり、24万人の市民のうち15万人が傷つき、そのうち7万4千人の方々方が命を奪われました。生き残った被爆者は、68年たった今もなお、放射線による白血病やがん発病への不安、そして深い心の傷を抱え続けています。

このむごい兵器をつくったのは人間です。広島と長崎で、二度までも使ったのも人間です。核実験を繰り返し地球を汚染し続けているのも人間です。人間はこれまで数々の過ちを犯してきました。だからこそ忘れてはならない過去の誓いを、立ち返るべき原点を、折にふれ確かめなければなりません。

日本政府に、被爆国としての原点に戻ることを求めます。

今年4月、ジュネーブで開催された核不拡散条約(NPT)再検討会議準備委員会で提出された核兵器の非人道性を訴える共同声明に、80か国が賛同しました。南アフリカなどの提案国は、わが国にも賛同の署名を求めました。しかし、日本政府は署名せず、世界の期待を裏切りました。人類はいかなる状況においても核兵器を使うべきではない、という文言が受け入れられないとすれば、核兵器の使用を状況によっては認めるという姿勢を日本政府は示したことになります。これは二度と、世界の誰にも被爆の経験させないという、被爆国としての原点に反します。

インドとの原子力協定交渉の再開についても同じです。NPTに加盟せず核保有したインドへの原子力協力は、核兵器保有国をこれ以上増やさないためのルールを定めたNPTを形骸化することになります。NPTを脱退して核保有をめざす北朝鮮などの動きを正当化する口実を与え、朝鮮半島の非核化の妨げにもなります。

日本政府には、被爆国としての原点に戻ることを求めます。

非核三原則の法制化への取り組み、北東アジア非核兵器地帯検討の呼びかけなど、被爆国としてのリーダーシップを具体的な行動に移すことを求めます。

核兵器保有国には、NPTの中で核軍縮への誠実な努力義務が課されています。これは世界に対する約束です。

2009年4月、アメリカのオバマ大統領はプラハで「核兵器のない世界」を目指す決意を示しました。今年6月にはベルリンで、「核兵器が存在する限り、私たちは真に安全ではない」と述べ、さらなる核軍縮に取り組むことを明らかにしました。被爆地はオバマ大統領の姿勢を支持します。しかし、世界には今も1万7千発以上の核弾頭が存在し、その90%以上がアメリカとロシアのものです。オバマ大統領、ブーチン大統領、もっと早く、もっと大胆に核弾頭の削減に取り組んでください。「核兵器のない世界」を遠い夢とするのではなく、人間が早急に解決すべき課題として、核兵器の廃絶に取り組む、世界との約束を果たすべきです。

核兵器のない世界の実現を、国のリーダーだけにまかせるのではなく、市民社会を構成する私たち一人ひとりにもできることがあります。

「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないやうにする」という日本国憲法前文には、平和を希求するという日本国民の固い決意がこめられています。かつて戦争が多くの人々の命を奪い、心と体を深く傷つけた事実を、戦争がもたらした数々のむごい光景を、決して忘れない、決して繰り返さない、という平和希求の原点を忘れないためには、戦争体験、被爆体験を語り継ぐことが不可欠です。

若い世代の皆さん、被爆者の声を聞いたことがありますか。「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ウォー、ノーモア・ヒバクシャ」と叫ぶ声を。

あなた方は被爆者の声を直接聞くことができる最後の世代です。68年前、原子雲の下で何があったのか。なぜ被爆者は未来のために身を削りながら核兵器廃絶を訴え続けるのか。被爆者の声に耳を傾けてみてください。そして、あなたが住む世界、あなたの子どもたちが生きる未来に核兵器が存在していいのか。考えてみてください。互いに話し合ってみてください。あなたたちこそが未来なのです。

地域の市民としてできることもあります。わが国では自治体の90%近くが非核宣言をしています。非核宣言は、核兵器の犠牲者になることを拒み、平和を求める市民の決意を示すものです。宣言をした自治体でつくる日本非核宣言自治体協議会は今年、設立30周年を迎えました。皆さんが宣言を行動に移そうとするときは、協議会も、被爆地も、仲間として力をお貸しします。

長崎では、今年11月、「第5回核兵器廃絶—地球市民集会ナガサキ」を開催します。市民の力で、核兵器廃絶を被爆地から世界へ発信します。

東京電力福島第一原子力発電所の事故は、未だ収束せず、放射能の被害は拡大しています。多くの方々方が平穏な日々を突然奪われたうえ、将来の見通しが立たない暮らしを強いられています。長崎は、福島の日も早い復興を願い、応援していきます。

先月、核兵器廃絶を訴え、被爆者援護の充実のために力を尽くしてきた山口仙二さんが亡くなりました。被爆者はいよいよよ少なくなり、平均年齢は78歳を超えました。高齢化する被爆者の援護の充実をあらためて求めます。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げ、広島市と協力して核兵器のない世界の実現に努力し続けることをここに宣言します。

2013年(平成25年)8月9日

長崎市長 田上 富久